
赤の学園

葉月ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤の学園

【コード】

N3601C

【作者名】

葉月ちゃん

【あらすじ】

なんつーか、ノリで書いてます。ノリノリで読んで下さい。

第1話 出会い

ロシアには「赤の広場」と、呼ばれる広場がある。本当の広さは知らないが、オレ達の学園にも本物の6分の1サイズの赤の広場がある。

それでオレらはこの学園を『赤の学園』と呼んでいる。

もちろん本当の名前を「赤峰学園男子高等学校」と言うのもあるが。

4月、新しい季節が来た。

校庭の桜が美しく咲き誇る。

あくびをしているのは、我らが爆睡王、龍馬。

始業式で校長が、

「新任の先生を紹介します、時藤友子先生です。」

と、言った。で、その先生を見た瞬間、誰かが、ガタツと倒れた。

もちろんこの学園にも女の先生はいたが、そのセンコーは、

丸メガネで（今ドキそんなのあるか!!）

三つ編みで（戦前か!!）

背が低かった。

「初めまして！食堂で働くことになった、時藤友子です！

まだ18歳の未熟者ですが、よろしくお願いします!!」

「と、言う訳で皆さん仲良くして下さい。」

どーゆー訳だよ!!

始業式の後、オレ達はオンボロ教室の隅でたむろってた。

「つーかありえなくね!? あの丸眼鏡とか三つ編みとか」

「そーだよな! 挨拶も関西弁訛りだったしよお」

「でも18って」

「ありえないし」

「オレら(高3)と同じだし」

「まっさか」

「恋に落ちる奴なんて」

「いねーよなあ」

なかなか滑らかなトークパス。

「拓也はもういるし」

「あのたつくんって呼んでる女だろ」

「晋吾はいたっけ?」

「ハア!? 何言つてんだ、こないだきただろ!」

「セリフなげーよ、読者飽きるだろ」

「同じく」

「古っ」

「どうでもいいだろ!」

キーンコーンカーンコーン

最後だけやる気のなさそうなうちの学園のチャイム。

席に着く真面目なヤツ数人。

席に着かない大多数。

だいたい先生も遅れる。

それじゃだめじゃん!!--と、

他の学校の生徒は言うだろう。

だが、この学園ではいいのだ!

なんせ落ちこぼれの集まる学園。

先生も落ちこぼれ。

生徒も落ちこぼれ。

生徒にセクハラして追い出された先生あり。

煙草に手を出して退学した生徒あり。

秩序なんか死語だ。

そんな学園に舞い降りた天使。

・・・ではないが、一見真面目そうな彼女に、この劣悪な環境は耐えられるのか！？

でもまあ、保健室の先生も耐えてるしいいか！
ほっとけば。

第2話 噂

「おつきろ〜！！朝だー！ー！！ごぶっ」

「まったく朝からるっせーんだよ！体育会系！」

「だからって急に足を上げるなよ！は、鼻血が・・・」

「自業自得だバーカ」

赤の学園は寮制である。

4人で1つの部屋を使い、どの部屋にも1人は真面目な奴がいて、そいつが

部屋の全員を起こすシステムになっている。

考えた校長もなかなか良いじゃないか。

起き抜けの気だるい空気の中、食堂にぞろぞろと人が集まる。

なんかアリみたいだな。

そんな男だらけの人いきれの中で、赤いチェックのバンダナが忙しなく動いている。

あー、んー、確か時藤友子だったかな。

それより腹減った、メシメシ。

「よう！今日もひでえ寝癖だなあ」

「ハッ、お前に言われたくないね天パ」

「天パじゃねえ！自然パーマだ！」

「どつちも同じだ!!」

バチバチと火花を散らした睨み合いが始まるうとしたとき、

「あの〜、はよしてもらわないと困るんですけど」

「何だつてえ!!!?」

「だつてホラ」

振り返ると暗い殺気を放ち、目をギラギラさせた同級生（柔道部の80キロ以上の猛者）がいた。

「・・・どーもすみませーん」

コソコソと逃げ帰る。

「・・・食いものの恨みは相当でけえな」

「いっえ〜」

「ってか今あいつバリバリ関西弁だったよな」

「まさしく大阪人だったな」

その噂はあっという間に広まった。

1時間目の終わりには生徒全員が知っていた。うっん、なかなかの情報伝達網。

褒めて進ぜよう。

あれから1週間
早いもんだな、もうすぐG・Wだ。

時藤友子に関する情報は大洪水だった。

例えば純一が持ってきたヤツ。 おおまかに書くと、アイツの兄が
ビル・ゲイツの

第5秘書だとか。・・・嘘っぽいけどな。

あとは宏史が持ってきたヤツは、アイツの親父がアル中のバカでお
袋が知的障害者だから

兄貴の送ってきた金を片っ端から使いまくるからアイツは学校に行
かず、働いてるんだと。

こっちのほうが本当っぽい。

で、アイツが3年C組の明に告ったという噂が流れたが、明が
「されてない」

と、言ったのでチャラになった。

「アイツ誰が好きなんだろうな」

「以外とお前だったりして」

「真面目な女はタイプじゃない」

「だよなー、オレも」

「オレも」

「オレも」

「うわいっばい来た」

「でも」

「こんだけ男がいるから」

「1人ぐらいは」

「好みのタイプが」

「いるかもな」

一同

「ゲーーーーー!!!」

「まさか」

「オレじゃ」

「ねえよな」

皆冷や汗ダラダラ。

「明はもうねえよな」

「多分な」

「代わってくれ」

「やだね」

ドイツもコイツも考えてることは同じ。

って、オレもそうだけどな

第3話 変化

オレンジ色の夕日が差し込む廊下。

保健室の前を通りかかったらボソボソと話声聞こえた。
アイツと保健の水野だ。

「私ってダサイですよね…、だから男子達にも噂にされるんですよ
…明君なんて
今まで知らなかったのに……」

「噂は気にしない方が得よ、すぐ消えるんだから……、ダサイのは
改善できるわ

よ、メガネと髪型を変えたら何とでもなるんじゃない？」

「そうですね、よし！今からがんばってお金貯めます……」

今からかい！！

「お父さんのアル中まだ治らないの？」

「はい治らないんですけど夜は冷蔵庫に鍵掛けてあるし、親父はい
すに縛り付け
てあるので大丈夫です」

おいしいい〜、その対応が大丈夫じゃないぞ〜

「そっか、それは良かった」

ちっとも良くねえ〜

親父同情するぜ。
でもだからって助けてやんないからな！
洋の情報本当だったな。

「起つきろー！！朝……グハツ」

「お前のだみ声は耳に悪い、もっと美声にしろ」

「腹……蹴りすぎじゃねえか？」

「大丈夫夫、大丈夫夫、コイツ腹筋割れてるから」

「イヤ、そういう問題じゃなくて……」

「なっ、内臓がぁぁー」

「ホラ大丈夫つつつてる」

「いや大丈夫じゃないぞ……」

いつもの朝のくだらない会話。

いつものくだらない雑踏。

いつもの赤いチェックのバンダナが忙しく動き回っている。
ところがバンダナの下顔が見慣れない顔だった。

………超美人。

「おっはようございまーす！ー！」

しかしその声は時藤友子のものだった。

へえー、アイツつてメガネと髪型変えると以外と美人じゃん。

可愛い者（物）に目が無い奴らは鼻の下伸びてる。

これだから幼稚な奴は困るんだ。

恋を待ち焦がれるなんて甘っちょろいことを考えていたらいつか噛みつかれる。

籠の中の鳥はいつか自分の所有物ではなくなる

指先に止まってくれた蝶はいつか何処かへ行く

いつも笑ってはくれない

いつも思い通りにはならない

信じられない

信じれない

信じたくない

信用できない

どろぼうじけん

第4話 過去

オレの名前は西崎和広。兄弟は兄が1人居る。
元の名は平松和広。両親が離婚してオレは母に、兄は父に引き取られた。

兄の名は平松和真。

オレは昔から兄貴より優しいと言われて来た。
そりゃそうだろう、兄貴はヤバイ奴らと組んで強盗を働いて今は刑務所の中だ。
だから彼女にもそう言われて有頂天になっていた。

「優しいんだね」

彼女にかかった水を払ったときに言われた言葉だ。

あの時は中学生でまだまだガキだったオレは簡単にその言葉を信じた。

あの日は2人とも花の水やり当番だったので遅れ、教室には誰も居なかった。

花に水をやっていると、

「私ね、ずっと和広の事が好きだったの。でね、でも他にも和広を好きな子はいたの。」

でも、どうしても伝えたい事があるの」

分かってはいたが

「何?」

と聞いた。

「私とお付き合いしてくれませんか？」

ほんのからかいのつもりで答えた。

「ああ、いいぜ」

それから彼女の方がオレを必要としているみたいだった。オレは身長178cmのかなりデカイ方で、彼女は155cmしかなかった。

だからキスする時にはオレがかなりかがんで、彼女が背伸びしなければならなかった。

唇を重ねる。

背中に手を回す。

ほんのお遊びがいつしか好きと言う気持ちに摩り替わる。

いつしか『かけがえのない人』になる。

キスを重ねるたびその想いが強くなる。

あの日やっと部活が終わってオレは帰ろうとしてふと、前を歩く人が目に留まった。

彼女と吹部の部長の中谷だった。

彼らは手を繋いで歩き、時折キスしていた。

駆け出してあいつらの仲を引き裂きたいような気持ちになったが、今出て行くとマズいのでやめた。

後日、放課後に呼び出して問い詰めると、

「そうよ」

と、あっさり答えた。

「別れよう」

「ええ」

そうしてオレらは別れた。

その時のシヨックは今も忘れられない。

女は常に隠し刀を持っている。

相手の首筋に突き立てれる牙もある。

キスでさえ武器になる。

彼女の名は時藤茜

第5話 過去、その後笑い

今日俺は1人になろうと思ひ、放課後に食堂へ行つた。
職員はもう帰っている頃と狙いをつけて行つたのだが、意外にも時
藤友子が残っていた。

「あつ、あのすいません！これ終わつたらすぐ帰りますんで……」

アイツはそう言つて忙しく働いた。
そんなアイツを見ながら聞いた。

「お前つて『時藤茜』つていう双子の妹がないか？」

アイツは一瞬ビクツと肩を震わせ、

「いますけど」

と、一言だけ言つた。

「そいつ俺の元カノ」

「えつ……けど妹は中谷君が好きだつて言つてたのに。まさか……」

アイツは相当ショックを受けたみたいだつた。

「俺は大丈夫だ」

本当の目的は時藤友子に付け込んで友達みたいな位置を取り、アイツの情報を流していこうという作戦だった。

俺ってあつたまいー！

だがおろおろしている時藤はちょっと可愛かった。

ハッ、いかんいかん。同情しては前回の二の舞だ。

だいたいコイツだつて信用無いんだから。

「あの……妹が傷付けちゃったみたいでごめんなさい」

「いや、もう気にしてないから」

うっわーコイツフェロモン出まくり。

こんな量どこにあるんだよ。

まったく、フェロモンは毒だ。

前の話とは関係無いが、後日職員室にて。

「マジっすか？」

「ああ、そういうことでヨロシク」

放心状態で教室に帰ると、

「よーうカズ！ゴリラの用事はなんだったかあ？」

と、聞かれた。

「おいカズ、顔色悪いぞ。何かあったか？」
とも聞かれた。

「……………学食委員長」

ボソツと答えると、まず

「…長すぎ」

と言う応答があつて、その後、

「」「マジで……………!?!?!?」「」

のフルコーラス。

「うるさい!?!」

「あんのゴリラ……………そんな事で呼び出したのか」

「許せん!?!」

「日本男児か!?!」

「タカトシか!?!」

「漫才やってんじゃねーよ」

「学食か……」

「しみじみ言うな！」

「取り合えず『頂きます』って言う委員長だろ」

「あと昼休み潰して机拭くんだろ」

「その委員との繋がり……」

「まったくなし」

「じゃあ」

「何で」

「ゴリラは」

「お前選んだんだ？」

「さあ？ゴリラに聞いてみねば？」

春の訪れ

学食委員の都合で昨日の昼休みを全部潰された俺は一向に会ってくれないゴリラに

怒りを爆発させていた。

その怒りに付き合っていたのは時藤友子である。

何でかと言うと、俺が昼寝をしていた所を時藤が邪魔をしたからという至ってシンプルな

理由だけ。

「それにしてもゴリラは……!!……?……!!」

さつきからずっとこんな調子。

笑顔で相づちをうつてる時藤に尊敬するよ。

「で、何でお前はココに居るの?」

「いまさらですか、遅いですね」

「はい、すみません」

「私もここでよく昼寝しに来るからですよ」

「へえ、じゃあここは昼寝スポット?」

みただな。

そして時はあつと言う間にすぎ、三月……。

順調に仕事や大学選びも終わり、あとは卒業のみ。

それを面白く思わない人が居る。
時藤だ。

さも憂鬱そうに窓際に座って溜息をついている。
そりゃ気持ちも分かんないでもないけど。
俺だってダチどもと別れんのは結構キツイいだけ。
女子ってよく分からない動物だな。

「はあ〜」

「なーに『はあ〜』なんて婆くさい溜息ついてんだか」

「だって〜もうすぐ皆卒業じゃん、なんか……寂しくて」

「そんなものかねえ〜」

「だって皆次のステップへ進んで行くのに、私だけここに置き去り
なんかも……」

「……………」

「置いてけぼりは嫌だよ……」

つづーっと滑らかな頬に涙が伝った。

涙はあとからあとから溢れてきて白衣の上に滴った。

「ねえ、置いてかないでよ。あたしも大学行きたいよ……」

「……………」

「つく……ひつく……っ……」

「…くなよ」

「え……？」

「泣くなよ、一緒に行こうぜ。大学」

「え？」

「行こうって言うてるだろ」

「一番自信のある笑顔で言ってみた。」

「だね」

春の訪れ（後書き）

えーとようやく終わりました。 変な終わり方ですけど、ご了承ください。
さい。

ホントはもっともっともくと長いけどばっさり切りました。
変なのは承知の上ですのでクレームはちょっと……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3601c/>

赤の学園

2010年10月22日09時48分発行